下町の恋人たち

早乙女 勝元

東邦出版社

作者紹介

早乙女 勝元 （さおとめ・かつもと）

★東京足立区に生まれる。高小在学中12歳で学徒動労動員。敗戦とともに高小を卒業。以後労動者として下町の中小企業を転々としながら、働く若者を主人公にした作品をつぎつぎと発表。

★作品は『下町の故郷』『ハモニカ工場』『ゆびきり』『小麦色の仲間たち』『青春の歯車』『太陽がほしい！』（以上理論社）『胸さわぎ』（大和書房）『火の瞳』（講談社）『美しい橋』（文理書院）『秘密』（角川書店）など。

★現住所は、東京都葛飾区高砂８―15―20

下町の恋人たち　　¥ 580

昭和45年10月15日　新装版第１刷発行

著　者　　早乙女勝元

発行者　　藤山真人

発行所　東京都千代田区神保町２の28（倉木ビル３Ｆ７）TEL（261）5726～7番 振替／東京 85275番　（株）東邦出版社

落丁・乱丁はおとりかえいたします。（株）東邦出版社

目次

下町の恋人たち
一目ぼれ
接吻
抱擁
ハネムーン
あとがき

203 137 75 5

装てい　三芳悌吉

さし絵　中谷泰

三芳悌吉

中島保彦

久米宏一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

下町の恋人たち／一目ぼれ

さし絵　中谷　泰

1

野崎勝治が小林咲子と知りあったのは、彼がそれまでの寮生活の息苦しさにたえかねて、薫荘という木造アパートの三畳間に移ってきたその夜のことである。

ひっこしは、一日の仕事をおえてからになったが、ふとんのほか荷物というほどのものもあるわけでなく、同僚の武藤茂がひやかしぎみに手伝ってくれたから、思ったよりもかんたんにすんだ。それでも赤ぐろく陽やけした三枚の畳の上にいっさいのがらくたをはこびこむと、いつのまにか手もとが暗くなっていた。腕時計は六時すぎ。もうこんな時間かとつぶやきながら、勝治はふと天井を見上げて、

「あれ、ま」

と、とんきょうな声をあげた。

「なんだ？」

と首をふりむけたのは、がらくたを整理していた茂である。

「ねえや、電球が……」

「それも自分もちってことさ」

「なるほど」

「みろ。アパートずまいってものは、一事が万事かくもゲンキンなもんだ。それでも、おめえは一人になりたいっていうんだから気がしれねえや」

「まあ、いい。朝起きてニキビづらばかし拝むよりはな」
勝治はふふとむせるように苦笑し、一人きりの自由をたっぷりと味あわしてもらうさ、とつぶやきながら、窓に手をかけた。古ぼけたガラス窓は、ぎくしゃくときしんで容易にすべらなかった。造作が悪く木のふちもくさっている。そのせいだ。だが、このわずかな空間から、下町のごみごみと密集した屋根のつらなりが闇のなかにひっそりとたたずむのを見ると、勝治は満足した。これこそ待望のワイドの空だ。あのベッド式の寮から、ついに解放されたというたしかな感動がある。もっとも三畳で二階、しかも部屋が南西に面していて陽あたりがいいからと、契約金額のほかに金五百円也の陽あたり代までとられたのは心外だったが、それもこの際は忘れるとしよう。
「おっと、これじゃ人間の指をたたいちまうぜ」
茂がハンマーで、とんとんと釘の頭を打ちならしながら、勝治の背後でぼやく。
「暗え、暗え。さっぱり見えやしねえ」
「オイ、そうやたらに釘ばかしうつなよ」
勝治が、そういってふりかえると、
「ばか。いくら荷物がねえったって、みろ、押しいれは三尺の超スモールだぞ。そこへふとんをいれたら、このうすぎたねえ下着類はどうなる？　天井にひもつって、そこへぶらさげるよりほか手がねえじゃねえか」
「なあるほど」
「ちょっ、これだから頭にくるんだ。まるで、ひとごとみたいな顔してよう……」

「しかし、空中から、きたねえのがワカメみたいにぶらさがってる図は、眺めとしちゃ最低だな。寮の三段ベッドと変らねえじゃねえか」

「頭をつかうんだ、頭を。いいか、この世の中のカーテンってものはな、ぼろかくしにこそあるんだ」

とにかく、ちょっといって電球を買ってくるからと、茂はハンマーを腰のベルトにつきさし、そそくさと部屋を出ていったが、勝治はタバコの一服に身をゆだねながら、窓の手すりに腰かけていた。よく動くやつだと苦笑しないわけにはいかなかった。あれやこれやと手伝ってくれるのはありがたいが、少々こうるさいことは否定できない。すこしゆっくりと、一人だけの自由にひたりたいのに。

勝治はタバコを口にくわえて、黒い屋根の上にただよう夕闇とスモッグとの黒っぽい配色に目をむけた。そのとき、突然に扉をたたかれたのである。

「はい」

答はない。

「どなたですか、どうぞ！」

扉が、がらがらときしんだ音をたててレールの上に鳴る。

勝治は、びくっとして腰をあげた。ひらいた扉の隙間に一人の女が立っている。廊下の明りを背にうけているのでその表情は暗く陰になっていたが、ひきしまったほおに二つの目がくろぐろと光って見えた。まだ若い。二十才ぐらいか。彼女は勝治の目をとらえてはなさず、

「あのぅ……」

と、早口にきりだした。
「おたくさんでドカドカやったものですから、うちの花びんがたおれて、こわれてしまったんです。困るんです！」
「え？　花びんが？」
「そうです。姉がとても大事にしていたものだったの」
「すると、あなたはおとなりさんですか？」
なにをいまさら——といったふうに、娘はきッと、その小さな下唇をつきだすようにした。勝治はうろたえた。こちらは目が闇になれているから、暗くても娘の表情がかなり鮮明にとらえられる。が、それは娘の目鼻だちがきわだって個性的だからだということに気づいた。ことにその目は大きく、まっくろに光って、さっきからまばたき一つしない。美しい、と直感的に勝治は思った。男ばかりの工場にいる勝治には、これまで女性とのふれあいは、ほとんど零にひとしかった。寮をはなれて一人になったのは、そんなバラ色のチャンスをかすかに心に期待したせいもある。しかし、寮を出たその日のうちに、こんなぐあいに女性につめよられようとは！
「そうだったんですか」
油気のない髪をざくざくと右手でかきあげながら、勝治は身をひくくして口ごもる。
「す、すみません。弁償させてください」
「じゃ」
と娘はおちついたもので、「うちの姉に、ひとことだけ、そういっていただきたいわ」
「はい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こうなると、いたずらをした小学生が職員室にひかれていくあの姿である。勝治は長身のからだをすまなさそうにちぢめて廊下へ出、娘のあとにつづいて隣室へむかった。

まだ挨拶まわりもしないうちに、見知らぬ女性にこんな醜態をさらさなければならないかと思うと、なんとも茂のやつがうらめしい。畜生、あいつ、とんでもないことをしてくれやがった。ぐうぜんにもとなりに二人の娘がいたというのに、ああ、おれはよくよくツイてないのだと勝治は思い、自分の不運に失望し、穴でもあったら入りたい気持である。

「どうも……」

隣室のひらいた扉のあいだに、おずおずとからだをわりこませると、小さな土間があって、その先は緑色のあつでのカーテンでしきられている。そのカーテンがさっと隅によせられて、螢光灯の光線がまぶしく勝治の目をつらぬいた。これはまた、なんとあたたかそうな、うるおいのある部屋だろう。壁一つへだてたとなりなのに、六畳の畳もサラサラと青みがかっていて、壁の色さえ明るくはずんでいるようにさえ思われる。いや、なかにいる人間によって、周囲がそう見えるのだろうか。妹よりもひとまわり大柄な色白の姉は、いかにもたっぷりとふくよかな感じで、それだけにかえって女性的なのである。彼女のオレンジ色のセーターが、この部屋の空気とよく調和されているのも目の薬になる。

勝治が頭に手をやりながらぼそぼそと卒直にわびると、この姉は、こころもち下ぶくれのほおに、すっきりと白い八重歯をのぞかせて、

「いえ、いいんですのよ、弁償だなんて。ただ、おとなりにどういう方がいらしたのか、ぜんぜんわからなかったものですから」

「あら、お姉さんたら！」
妹が、横から不服げに口をいれた。
「さっきは、あんなにがっかりしていたくせにどうかしてるわ、そのいい方」
「すみません！　も、この通りです」
勝治はせまい土間に突立って、ぴたりと両手を腰につけて最敬礼をしてみせた。こうするよりほかにしかたなかった。
勝治にしてみれば、なんともやりきれぬ思いだったが、それは逆転して、たいそうユーモラスな感じをあたえたのだろう。姉妹ははじめて笑った。姉のほうは口に手をあて、くっくっと肩をゆすって笑ったが、妹はぷっとふきだしたものの、すぐにその笑いをおさえてしまってこちんとしたポーズにかえっている。日常生活にも、隙を見せない娘だ。勝治は一瞬のあいだに、姉妹の性格の差を見せつけられたような気がした。
頭上の螢光灯が突然に消えたのは、まさにそのときであった。
「あら」
と姉の悲鳴につづいて、
「また！」
妹の声が、いらだたしげに闇に浮く。
「停電ですね。おや、廊下も消えている。トランスでも故障したのかな？」
「ちがうんです」
妹は、勝治の声を鋭くさえぎって、

「このアパートの管理人ときたら、十六所帯もあるのに、たった三十アンペアでまにあわせてるの。だから、この時間になると何回もきれるのよ」
「いつもですか？」
「ときどき」
「そりゃ、ひどい！」
勝治は、闇のなかで大げさにうめいた。
「で、アパートの人は、だれもさわがないんですか？」
「いえ、あたしたちも前は何回かいいにいったんですけれど、三十アンペアの上はキロ単位になるから、電気代がひどくかさむと管理人がおっしゃるんです。ですから、電気釜もいっぺんに使わないようにしてくれって。不便で困りますけど、電気代を口実に部屋代まで上げられるのは、もっと困りますし……」
きわめてひかえめな、姉のことばである。しかし、おちつきはらったもので、窓からさしこむ星明りをたよりに、かたかたと整理ダンスのひきだしをあけている様子。
「懐中電気もローソクも用意してありますの。いま、すぐつけますわ」
という。
勝治はそのとき、ふいに一つの決意をかためた。そうだ、これこそ名誉ばんかい策というものである。
「そのローソクを、ちょっくらかしてくれませんか。おれ、これからすぐいってきます」
「え、どこへ？」

「どこへって、もちろん管理人のところへですよ。これじゃ一人前の部屋代なんか取れる資格がねえ。そのくせ陽あたりがいいからなんていって、五百円もよぶんにふんだくりやがって！　おれ、だんことして交渉してきます。アンペアをキロにかえてもらって、そして、あの五百円は利子つきで返してもらうんだ！　待っててください」

勝治は妹の手から火のついた一本のロウソクを受けとると、姉妹のおどろきの顔を尻目に、わざと足音も高く廊下へとびだした。赤いほのおをともしたロウソクを右手ににぎりしめて、あたかも自分をつきとばすようにぐんぐんと階段へむかった。しかし、ロウソクをもつ手がふるえてほのおがゆれ、とけたロウが熱く指先に流れてくるのはどうしようもなかった。

2

それから一時間後。勝治と茂は、町の銭湯にいた。一杯やるだけの金がないときには、銭湯をアジトにするに限る。一人が二十八円。それで何時間でもねばれるし、気分はいいし、もちろん健康にも悪くないはずだ。のどがかわいたときには、その用意もある。蛇口にじかに口をおしつけて飲むテッカンビールの味は、また格別だった。二人はもう長いこと湯ぶねのふちにすわって、色あせたタオルを腰の上にのせ、茂は腕ぐみし、勝治はぴたぴたとお湯を手にすくってはものの上にひたし、まだ興奮のさめやらぬように息をはずませてしゃべる。

「うむ。……そりゃなんたって、ロウソクの効果は満点だった。赤いほのおのゆれるやつをデコンとつったててしかけたんだから、管理人もさすがにぎょッとなったらしいね。おれの作戦は

敵の虚をついた、まさにそんな感じだな」

「で、どした？」

と茂が、おもしろそうに先をせく。

勝治はそこで、にいっとばかりにほおをたるませた。結論からいえば、この交渉は成立した。陽あたり代まで取りかえすことはできなかったが、管理人はその貪欲そうなあつぼったい唇をねじまげてさっそく三十アンペアを四キロに変えることを確約したのだから、勝治にしてみれば思わぬ成果であった。これで電気代の基本料金なるものは五七七円八〇銭から一挙に千円代へハネ上るのだそうだが、十六室もの部屋代の上りからみれば、そんなものはツメのアカほどでもないだろう。もちろん、この吉報は姉妹の目を星のように輝かした。それから、さあどうぞどうぞというわけで、姉妹の部屋でリプトンの紅茶をごちそうになったのだが、それはたっぷりとレモンの香りのしみた甘ずっぱい味わいだったと、勝治はにんまりと目をほそめていう。

「そこでおれは思ったね。これぞ、ほんものの青春の味かもしらんとな」

茂は大いにあてられて、ふんと口のまわりにこじわをよせた。

「ま、そいつはおめでてえや」

畜生、といきなり湯ぶねにとびこみ、ああ……と嘆息まじりに「おれも、もう一足早かったらまにあったのになあ。惜しいことをしたもんだ」

「おめえもよ、電球だけ買って、さっさと戻ってくりゃグットタイミングだったんだ。といっても、もう後のまつりだがな。うわっはっはは……」

「途中でラーメンを一杯ひっかけた、あれがまずかった」

「意地きたねえやつは、かくの如しだ」
「なにイ、ひとのふんどしでスモウをとりやがったくせによ」
「ばかいえ。おれは、おめえの尻ぬぐいをしたんじゃねえか。まったく冷汗もんだったぜ」
「けっこうな冷汗だ」
「いいから、まあ、そのつぎをきけ」
勝治は湯気のたつタオルを四角にたたんで頭の上にのせ、自分もとっぷりと湯のなかに長身を沈めた。あごのあたりまで湯にひたりながら、鼻先にゆらぐ湯気をふきはらうようにして、さらにつづける。
「まずは停電さわぎのおかげで、花びんをこわした罪はパァになったし、その上プラス・アルファがついたってわけだ。このアルファがでかい。なにしろ彼女らのおれを見る目が、前とすっかりちがっていたからなあ……」
たっぷりとレモンのシェークされた紅茶の香りにつつまれながら、彼が野崎勝治です、とぶきっちょに名のりをあげると、姉妹ははじめて自分の名をあきらかにした。姉のほうは由美子といって洋裁師、妹は咲子で美容院のインターンだという。そこで勝治は少々当惑しないわけにはいかなかった。由美子が興味ありげに彼の職業までたずねたからである。まさか、入れ歯を作っているのですとはいえなかった。勝治の職業は、正確にいえば歯科技工会社の営業マンということになるのだが、彼はことばをにごして、ある金属会社の営業部員だと体をかわした。ほっと一息というところである。
こうして、たがいに名のりをあげた以上、ささやかながらも今後のレールがひかれたわけである

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com